難波西鶴と海の道

【77】

森田　雅也

対照的な芭蕉と西鶴

後味の悪さと韜晦性

前回は西鶴の地誌『一目玉鉾』と芭蕉の紀行文『奥の細道』の関係について述べました。テーマからは脱線です。

芭蕉は『奥の細道』で歌枕「しのぶもぢ摺り」（福島市山口）を訪れて、「明くれば、しのぶもぢ摺の石をたづねて忍ぶの里に行く。遥か山陰の小里に、石なかば土に埋れてあり。里の童部の来りて教へける、昔は此の山の上に侍りしを、往来の人の麦草をあらして此の石を試み侍るをにくみて、此の谷につき落せば、石の面下さまに伏したりといふ。さもあるべき事にや」と書き残しています。

歌枕「しのぶもぢ摺り」の歌は『古今集』にある、源融と土地の娘虎女との悲恋を歌った「みちのくのしのぶもぢずり誰ゆへにみだれんとおもふ我ならなくに」が有名です。「しのぶもぢ摺りの石」とは、昔、安積国信夫郡でとれた忍草の茎や葉の色素で、ねじれ模様の「摺絹」を作りましたが、これはもじ摺りの石にこすりつけて作ったものだと解されていました。

「忍草」はいろいろな解釈がありますが、歌の意味からは「忘れ草」がいいでしょう。「忘れ草」とは、今のカンゾウ（萱草）の一種。ユリ科の多年草で、夏、花茎を伸ばし、黄赤色の八重咲きの花をつけるそうです。ただ、染料として優れていたかどうかは不明です。

芭蕉は二本松（福島県二本松市）を出て、謡曲『安達ヶ原』で有名な鬼婆が住んだとされる「黒塚の岩屋」に立ち寄った明くる日、歌枕「しのぶもぢ摺り」の石をたずねて、「忍ぶの里」を訪ねます。すると街からはるかに離れた山かげの集落に半分土に埋もれたもじ摺石がありました。

ところが、村の子どもたちが言うには、「昔、この石は山の上にあったけれども、そのもじ摺の具合を試そうという観光客が増えて、せっかく作った麦を踏んづけるので、この谷底に落としたところ、石がひっくり返って、肝心の摺り面が下になってしまったよ」と言います。そんなこともあると芭蕉は納得したようですが、謎のままです。本当の話なのかどうかだまされた後味悪さです。

かたや西鶴は『一目玉鉾』で「東路の名所旧跡を改め夷が千鳴の千鮭の目も見ぬ事は人にかたるべき種なし。忍ぶ摺の石を熊宮には入れがたし」としています。

東北の名所旧跡は調べたけれど、北海道千島の有名な千鮭は見ていないから語りようがないが「忍ぶ摺の石」の方は火打ち箱には入らないほど大きかったよ、というのです。西鶴らしい韜晦性ですね。

（関西学院大学文学部文学言語学科教授）